

volunteer Guide Book

ボランティア・ガイドブック



しょうずぐん とのしょうちょう

香川県小豆郡土庄町商工会

小規模事業者新事業全国展開支援事業委員会

〒761-4121 香川県小豆郡土庄町湊崎甲1389-12

TEL(0879)62-0427・FAX(0879)62-0488

<http://tonosho-shokokai.com>

E-mail:info@tonosho-shokokai.com

だれと歩こうか迷いみち

山豆島・迷路のまち

美しい自然と平和な小豆島も、約六八〇年前には、王権の存亡かけ、新たな権威を模索する南北朝の動乱の戦いに引き込まれました。

延元四年（一三三九年）備前児島の勇将、佐々木信胤は軍勢とともに、小豆島へ押し入り星ヶ城に陣を構えました。しかし、その八年後には北朝方の四国の総大将、細川頼春の指示のもとに、細川師氏が大軍を率いて小豆島に攻め寄せ、南北両朝の軍勢が海上と陸上とで、総力をあげての血斗の地となったのです。

今なお、土庄町本町に残る複雑な迷路は、当時の攻防戦に備えた路地の形成を成し、全国に現存する数少ない迷路のひとつです。

また「迷路のまち」には、天正十一年



西光寺横の共同井戸端（昭和30年頃）

(一五八三年) 秀吉の大坂城築城に際して加藤清正公が、また元和六年(一六二〇年)徳川幕府になって加藤忠広公が、それぞれ採石奉行として止宿した陣屋跡が今も現存しています。

大銀杏が空を仰ぐ、小豆島霊場五十八番西光寺の朱色に輝く四恩の門前から、俳句「咳をしても一人」で知られる孤高の俳人「尾崎放哉」終焉の地「南郷庵(みなんごあん)」へと迷路は続きます。そのまま海岸沿いに歩くと、引き潮時に浮かぶロマンチックな白砂の道は「エンジェルロード」として、小豆島の人気スポットです。

世界一狭い海峡「土淵海峡」から迷路に入ると、学問と書道の神さま「菅原道真公」を祀る土庄天神神社と小豆島霊場六十四番松風庵が、桜の名所にふさわしく優しく迎えてくれます。



目次

- 小豆島・迷路のまち…………… 1
- 小豆島ってどこ…………… 4
- 土庄町の紹介…………… 5
- オリーブの島…………… 6
- 赤松柳史句碑…………… 7
- 『二十四の瞳』平和の群像…………… 8
- 小豆島霊場…………… 9
- 土庄天神神社…………… 10
- 松風庵…………… 11

- 元屋商店…………… 12
- 土湊海峡…………… 13
- 永代橋…………… 14
- 郡役所跡…………… 15
- 加藤肥後守陣屋跡…………… 16
- 小豆島霊場第五十八番 西光寺…………… 17
- 西光寺の大イチョウ…………… 18
- 誓願の塔…………… 19
- 王子神社・荒神社…………… 20
- 小豆島尾崎放哉記念館…………… 21
- エンジェルロード…………… 22

1. 小豆島ってどうい

美しい瀬戸内海に浮かぶ 二番目に大きな島。

小豆島は香川県の北東部に位置する
周囲一二六キロメートル、面積一五三
平方キロメートルの島です。瀬戸内海
では兵庫県の淡路島に次ぐ広い面積で
す。島全体が瀬戸内海国立公園の一部
となっています。

小豆島は二つの島からなっていて、
形が仔牛に似ています。頭部に当たる
個所は前島と呼ばれる島です。橋で牛
の胴体部とつながっていて、橋の下は
海峡です。海峡の東側が胴体部にあた

る小豆島本島です。

山が高く海岸に迫っているの
平地は多くありません。川は高い山か
ら流れて来るので、どの川も流れが急
で、距離は短いです。気候は少雨乾燥
のいわゆる瀬戸内海性気候です。

小豆島には二町あります。西北部を
占める土庄町と中東南部を占める小豆
島町です。小豆島町は平成十八年（二
〇〇六）に中南部の池田町と東南部の
内海町が合併してできた新しい町で
す。人口は平成十九年（二〇〇七）十
二月現在、土庄町が一五、九〇七人、
小豆島町が一六、六二三人となってい
ます。

島の西方には豊島、小豊島という比
較的大きな島もあります。また、島の
周囲には二十二の小島が散在していま
す。島内の山は東部に行くにつれて高

くなっています。小豆島町にある星ヶ
城山（海拔八一七メートル）は瀬戸内
海の島にある山の最高峰で、香川県下
でも五番目に高い山です。



2. 土庄町の紹介

賑わいと、やすらぎのまちと
輝くひと、交流都市を目指す。

土庄町は豊島から小豆島西北部にか
けた地域を占め、東西五八キロメー
トル（西端の豊島水ヶ浦から東端の東灘
山まで）、南北十五キロメートル（南
端の大余島南から北端の田井妙見崎ま
で）あります。

昭和三十年（一九五五）のいわゆる
昭和の大合併により、旧・土庄町、
旧・測崎村、旧・大鐸村、旧・北浦村、
旧・四海村、旧・豊島村が合併し、さ
らに旧・大部村を編入して現在の土庄

町となりました。

土庄町は小豆島における行政また商
業の中心です。税務署、法務局、簡易
裁判所、ハローワーク、小豆総合事務
所などのように、国または県とのつな
がりのある公共機関があります。

島の西部の玄関口である土庄港は高
松、岡山、豊島、宇野をフェリーや高
速艇で結び、島内の港では最も賑わっ
ています。また、北部の大部港から日
生（岡山県備前市）までフェリーが運
航しています。

銀波浦と呼ばれている前島南部の海
岸地域には多くのホテル・旅館があり
ます。土庄・測崎地区には商業地域が
あります。

地場産業として、醤油・佃煮・ソー
メン・うどんなどの製造工場、縫製工
場もあります。特に、ごま製油工場で

は日本一の工場があり、原材料・製品
を輸出入して外国ともつながっていま
す。また、石材業・のり養殖業も盛ん
に営まれています。

学校は、県立高校が二校、町立中学
校が二校、町立小学校が五校あります。



土庄港

3. オリーブの島

平和のシンボルオリーブ。
日本で初めて植栽されて百年。



オリーブはヨーロッパ原産のモクセイ科の植物です。葉が小さくて硬く、比較的乾燥に強いことから南フランス、イタリア、スペイン、ギリシヤなどの地中海地方で広く栽培されています。種類もルッカ、ミッシヨン、マンザニコなどと多種にわたっています。オリーブは旧約聖書にも登場する古い歴史のある木で、鳩とともに平和の

象徴とされています。これは『創世記』の「ノアの方舟」の記述に基づいています。大洪水の後、陸地を捜すためにノアが放った鳩がオリーブの枝をくわえて戻って来ました。これによって洪水が引き始めたことが分かったのです。日本でオリーブと言えば小豆島がすぐに出てくるほど、オリーブと小豆島は深い関係にあります。小豆島でオリーブ栽培が始まったのは明治四十一年（一九〇八）のことでした。農商務省の委嘱を受けた香川県農事試験場が西村にオリーブを試植しました。三年後に果実を採取することができ、小豆島でもオリーブが生育して結実することが証明されました。小豆島の他、三重県と鹿児島県にも試植されましたが、成功したのは小豆島のものだけでした。少雨乾燥という瀬戸内海性気候がオリ

ーブの生育に適していたからです。その後百年にわたってオリーブは小豆島の地場産業の一翼を担ってきました。果実は食用油、化粧油、塩漬け（ピクルス）、葉は茶や装飾用リース、木は工芸品というふうには、どこを取っても捨てる場所がありません。特に最近では健康食品ブームと言うことで、食用油に人気が集まっています。

平成二十年（二〇〇八）は小豆島でのオリーブ植栽百周年という記念すべき年です。小豆島町西村のオリーブヶ丘を中心に、島内各地で関連する多くの行事が計画されています。なお、オリーブは香川県の県木・県花にもなっています。また、土庄町の豊島甲生地区には日本一のオリーブ園があります。

4. 赤松柳史句碑

花鳥自然を見る目で 人生を觀た感動の句。

赤松柳史（本名・正次）は明治三十四年（一九〇一）に土庄町本町で生まれました。俳句を松瀬清々に学び、日本画を森二鳳に師事し、その後「柳史俳画」を独創しました。太平洋戦争中は俳句・俳画をもって部隊を慰問しました。

昭和二十三年（一九四八）、俳画誌「砂丘」を創刊し、砂丘会の主宰者として、俳画の普及指導に努めました。四十八年（一九七三）、オリーブ神社

に「句碑の森」を造成し、四十八基の句碑を建立しました。四十九年（一九七四）、七十三歳で京都で急逝しました。

柳史の句碑は全国に合わせて九基あります。京都清水寺には「清水のとはほし畏し冬紅葉」という有名な句碑があります。小豆島内には六基あって、うち三基が土庄町内にあります。それぞれの俳句・建立年・建立場所は以下の通りです。

「親猿も子猿もしたしけさの秋」

（昭和三十六年 銚子溪）

「鹿垣はむかしの人のつくりたる」

（昭和五十二年 笠ヶ滝）

「一切を佛にまかせ蟻這へり」

（平成四年 土庄港）

三句目は赤松柳史顕彰会が土庄港ターミナルに建立したものです。句碑裏

面の説明文の一部に以下のように書かれています。

『表面掲出の俳句「一切を佛にまかせて蟻這へり」の註解は野暮。

言うことは働き蟻の天分。働くことは人の天分。小豆島霊場巡拝へんろ姿と、言う蟻の姿とを重ねた敬虔な姿への柳史の人生観の一句である。花鳥自然を見る目でその人生を觀た柳史感動の句の一つ。俳界挙げて推奨の、しかも小豆島びつたりりの俳句となすか。』



赤松柳史句碑

『二十四の瞳』平和の群像

若いおなご先生と十二人の子どもたちとの愛情物語。

土庄港の緑地公園前にブロンズ製の群像があります。小豆島を訪れた観光客の多くがこの群像の前で記念写真を撮るほど有名なものです。この群像は小豆島町坂手出身の小説家壺井栄の代表作『二十四の瞳』を元に制作されたもので、『二十四の瞳』平和の群像と呼ばれています。

『二十四の瞳』はキリスト教の月刊誌『ニューエイジ』（教文館発行）に昭和二十七年（一九二五）二月から同

年十一月まで連載された小説です。大石久子先生と十二人の教え子たちとの心の交流、戦争の悲惨さと傷跡の大きさ、平和への思いを色濃く描いたもので、連載当時から好評を博しました。

昭和二十九年（一九五四）に監督木下恵介、主演高峰秀子により映画化され、見る人に大きな感動を与えました。この映画によって小豆島は全国に知られるようになり、観光の島となりました。

群像は丸亀市出身の彫刻家・矢野秀徳（明治四十年〜平成八年）によって制作されました。台座題字「平和の群像」を揮毫したのは時の首相・鳩山一郎です。題字の少し右側に時の文相・大達茂雄の映画感想文の金属板が埋め込まれています。群像の除幕式は昭和三十一年（一九五六）十一月に開催さ

れ、原作者壺井栄、監督木下恵介、主演女優高峰秀子を始めとする、参加者二百人を超える盛大な式でした。

以来、五十年以上にわたって地元の人たちはこの群像を大切に維持管理してきました。群像および台座付近の掃除、台座周囲のオリーブの剪定などが定期的に行われて現在に至っています。



平和の群像

6. 小豆島霊場

豊かな自然と出会い華遍路 自分自身と出会う旅。

小豆島霊場は小豆島内の寺院、庵堂合わせて八十八ヶ所が巡拝できるように選定し、一番から八十八番まで順番を付けたものです。一般に島四国と呼ばれています。

『小豆郡誌』によると、小豆島八十八ヶ所は貞享三年（一六八六）に島内の真言宗僧侶たちが協議して創設したと書かれています。四国巡拝は人々の念願ですが、誰もが簡単にできるものではありません。小豆島は手軽に一周

できるので、四国巡拝霊場（札所）八十八ヶ所をまねて同様の霊験が得られる方法を考えました。これが小豆島霊場の起源だとされています。

八十八ヶ所は小豆島全島にわたっています。まず小豆島町坂手の洞雲山から始まり、小豆島町の旧・内海地区から小豆島町中部の三都半島、池田、中山を経て、土庄町に入り、肥土山、湖崎、前島、四海、小馬越、北浦、大部へと続き、再び小豆島町に入り、福田を経て、小豆島町東南部（東浦）に位置する橋の楠霊庵で終了（結願）します。

大正二年（一九一三）に小豆島霊場会が設立されました。霊場案内、公認団体、公認先達などに関する一切の事務を行っています。また、一般参拝者についても団体また個人を問わず、巡

拝に関する諸相談に応じています。なお、霊場会事務所に当たる小豆島霊場総本院が土庄町西本町にあります。



島開き風景

7. 土庄天神神社

学問の神様を祀り、
春には桜吹雪が舞う名所。

土庄天神神社は土庄町本町天神山にあります。天神という名が示すように、祭神は菅原道真です。『土庄町誌』には「嘉永五年の書に、遍礼五十九番札所なり、祭礼六月二十五日。草庵本社石段下にあり、宮守りの僧ここに住す。地藏菩薩を安んず」と書かれています。天神神社は天神山麓からかなり急な石段を登った先にあります。社殿は平成五年（一九九三）に改築されたものです。社殿前に二つの石柱が建っ

ます。向かって左側の石柱表面に「草木改精神」、裏面に「爲菅公一千年祭奉納 誠友會」と書かれています。また、右側の石柱表面に「文章争日月」、裏面に「明治三十五年三月二十五日 誠友會」と書かれています。

天神山麓から神社に続く石段を少し登ると、右手に小さな公園があります。この辺り一帯は桜の名所で、春ともなれば多くの花見客で賑わいます。



土庄天神神社

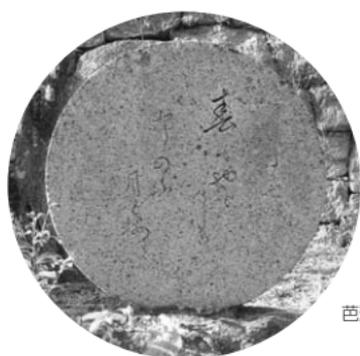
8. 松風庵

芭蕉の句碑もひっそりと
あなたも詩人になれそう。

松風庵は小豆島霊場第六十四番札所で、土庄町天神山にあります。天神山麓からかなり急な石段を少し登って左に折れて行った先にあります。本尊は延命地藏菩薩です。詠歌は「世のちりに人の心をけがさじと吹き払うらん庭の松風」というものです。

堂宇(堂の建物)は宝形造りで、平瓦葺きの棟の上に宝珠が置かれています。向拝(屋根を正面の階段上に張り出した部分)は現代の作と言われている。

ます。すぐ隣に大師堂があります。庵の前を右に少し進むと天神神社社殿前の石段に出ます。石段の少し手前に丸形をした松尾芭蕉の句碑があります。「はせを 春もや、けしきと、のふ月と梅」と書かれています。明治二十八年(一八九五)に地元の俳人中塚梅雪、三枝節水、三枝卓水によって建立されました。



芭蕉の句碑



松風庵

9. 元屋商店

文政十二年創業（登録有形文化財）
永年育まれた名品が人気。

元屋商店は土庄小学校の隣にあつて、「島松竹醤油」という銘柄の醤油を製造しています。江戸時代末期の文政十二年（一八二九）に創業した小豆島で最も古い醤油工場の一つです。屋号は創業者の元屋源九郎に由来しています。

現在の主屋は明治時代中期に建造された入母屋式です。屋根は二重庇（ひさし）となっています。社屋は現在も稼働中の工場で、文化庁の登録有形文

化財となっています。

中へ入ると大正時代から昭和時代にかけてのレトロな看板等が飾られています。以前の銘柄である「松竹梅」と書かれた前掛けはジャムやマーメイドで知られる明治屋の制作です。通路の事務机の上に秘伝とも言える仕込み製成帳や台帳が並べてあります。棚には商品の数々が所狭しと陳列されています。



元屋商店

10. 土渕海峡

世界一狭い海峡
ギネスブックに認定される。

土渕海峡は前島と小豆島本島の間を流れる海峡です。前島側の土庄地区と対岸である渕崎地区の最初の文字を取って名付けられました。全長は二・五キロメートル、幅は最も狭い個所で九・九三メートルです。平成八年（一九九六）にギネスブックから世界一狭い海峡に認定されました。

土渕海峡には四つの橋が架かっています。東から順に、オリーブ大橋、オリーブブリッジ、永代橋、ふれとぴ

あ橋です。オリーブ大橋は最大の橋です。オリーブブリッジは最小の橋で、歩行者専用です。主として近くにある土庄高校生が利用しています。永代橋とふれとぴあ橋の間の西側一部はふれとぴあ公園と呼ばれる公園となっています。公園の下は海峡です。

土渕海峡のすぐ南に土庄町役場があります。ここは毎年十一月末に開催される瀬戸内海タートルマラソンのスタートおよびゴール地点となっています。二千人を超えるランナーはスタート直後またゴール直前に世界一狭い海峡を渡ることになります。町役場では希望者に百円で絵葉書形式の海峡横断証明書を発行しています。



土渕海峡

11. 永代橋

昔は土庄湊と呼ばれ
渡海船の島の玄関として賑わう。

永代橋は土淵海峡に最も古くから架かっている橋です。『小豆郡誌』には天保九年（一八三八）の調査で、長さ六間半、巾七尺、欄干の高さ二尺、左右の柱二十八本で、満潮時には橋下を百石以下の船が通ったと書かれています。

永代橋はその後何回か架け替えられました。昭和に入ってから、昭和六年（一九三一）に老朽化のために鉄筋コンクリート橋に架け替えられました。

た。その後、交通量の増加とともに架け替えを迫られ、昭和四十五年（一九七〇）に従来の二倍の幅を持つ現代的な橋となりました。

永代橋がある辺りは昭和三十年（一九五五）頃までは深い入り江で、古くは土庄湊と呼ばれていました。多くの渡海船（貨客輸送にあたった小型廻船）や漁船が発着していました。そのため海上の安全を祈願する常夜灯が永代橋の南東側に設置されました。台座に「文化壬申之春」と書かれているので、文化九年（一八一二）に建てられました。小豆島産の花崗岩を使ったもので、永代橋の石灯籠と呼ばれました。

この歴史ある常夜灯は昭和四十五年の架け替えの際に撤去されました。その後、昭和六十三年（一九八八）に町文化財に指定されました。現在は土庄

町役場駐車場の一角に納まり、海峡を見つめています。



明治22年頃の永代橋

12. 郡役所跡

明治九年愛媛県となり
はじめて小豆郡と名がつく。

明治九年（一八七六）に香川県は合併して愛媛県となりました。同十一年（一八七八）末に愛媛県が郡制を実施しました。それに伴って小豆島が新しく一つの郡となり、小豆郡と名付けられました。

同十二年（一八七九）一月に小豆郡役所が渚崎村（現・土庄町渚崎）に設置されました。同年四月に土庄前島に庁舎が新築されるまでの暫定措置でした。新築された場所は江戸時代の大庄

屋笠井家跡地で、現在の土庄町本町の字東元浜甲三九三番地の二でした。花崗岩の高い角柱に鉄格子が付いていたと言われています。「小豆郡誌」には新築当時、書記が九名、事務分掌は庶務掛の他に六掛あったと書かれています。その後、書記数、事務分掌数ともに増加していきました。

明治三十二年（一八九九）に法律によって郡制が公布されました。郡会を組織し、議員選挙区を設定し、郡を土庄（前島地区）を第一区とする計十三区としました。同三十六年（一九〇三）に新しく西村村、坂手村、福田村（以上いずれも旧・内海町の集落で、現・小豆島町）を独立させました。

大正十二年（一九二三）に郡制が廃止され、郡は地方自治体ではなくなり、地方行政の一区画となりました。それ

に伴って大正十五年（一九二六）に郡役所は廃止されました。



郡役所跡

13. 加藤肥後守陣屋跡

秀吉時代・徳川時代に

大坂城築城の採石奉行の陣屋。

小豆島は石材の島としても有名です。特に花崗岩は硬くて緻密で光沢があるので重宝されてきました。

小豆島の石材を有名にしたのは豊臣秀吉でした。秀吉は天下統一のため、天正十一年（一五八三）に大坂城築城に着手しました。まず、西国三十余国の大名に命じて、大きな石を運搬させました。石材は御影（現在の神戸市東灘区）や小豆島などから特に多く取り寄せたと言われています。

小豆島での採石に当たって採石奉行として来島したのが加藤清正、片桐且元、黒田孝高などでした。「小豆郡誌」には大坂城追手門見付の巨石は小瀬千軒地区から採掘したと書かれています。

そこを監督したのが加藤肥後守でした。土庄の大庄屋笠井家に宿泊して九ヶ所の丁場（採石場）の監督をしました。笠井家を去る際に備前国長船与三左衛門尉祐定作の佩刀一振、珊瑚数珠一連、古墨一個を贈与しました。

陣屋は笠井家の広大な屋敷の一角、現在の西光寺門前の銀杏通りの真ん中にありました。現在でもそこには清正公神社・土蔵、その他いくつかの建物が残されていて往時を偲ばせてくれます。



陣屋跡

唱えるお経に声を震わし
それぞれの感動がゆれる。

西光寺は土庄町の繁華街に位置する真言宗大覚寺派の名刹です。島四国五十八番札所となっていて、正式の名称を王子山蓮華院西光寺と言います。

『小豆郡誌』には弘安年間（一二七八〜一二八八）に増伴僧正高弟の増密法印が鹿島に創建し、その後、慶長年間（一五九六〜一六一五）に龍弘法印がこの地に堂宇を建立したと書かれています。寺伝では創建が天正七年（一五七九）となっています。また、『土

庄町誌』には元禄九年（一六九六）に第十世増如上人が京都嵯峨大覚寺より寺号公称を許されたと書かれています。

本堂は宝暦八年（一七五八）に建立され、昭和八年（一九三三）に再建されました。建築様式は桃山式で、島内でも最大級のもので、戒壇に奉られている秘鍵大師は大覚寺の秘仏と言われています。本堂前には樹齢二五〇年以上にもなる大イチョウが天を突くように立っています。山門は昭和六十年（一九八五）に再建され、四恩門と呼ばれています。客殿・庫裏・事務所は平成十六年（二〇〇四）に改築されました。

大きな行事として大正三年（一九一四）から開催されている大師市があります。これは元来本尊千手観音菩薩の

宝木を受け、福を奪い合う会式で、毎年旧暦三月二十日と十一月二十日に開催されてきました。現在では四月二十一日と十二月二十一日に開催されています。寺に続く通りには多くの出店が立って賑わい、小豆島の春と冬の恒例行事また風物詩となっています。



四恩門

15. 西光寺の大イチョウ

お遍路さんをやさしく迎える
境内を覆う大イチョウ。

イチョウは中国原産の科一種という珍しい植物で、雌雄異株です。春から夏にかけて青々としている葉は秋には黄葉して落葉します。種子は銀杏と呼ばれ、茶碗蒸しなどの料理に使われます。幹や枝から気根を垂らすことがあります。別名「乳の木」とも言われています。盆栽や街路樹となり、材は碁盤・将棋盤などに使われるというふうにも、馴染みのある木です。

西光寺境内にあるイチョウは雌木

で、土庄町内では高さ、太さともに最大級です。高さは約二五メートル、太さは眼の高さの所で幹周り約三メートルあり、地上約四メートルの所で枝分かれしています。推定年齢二五〇年以上とも言われ、気根が垂れています。西光寺は言うに及ばず、この地域のシンボルともなっています。平成五年

(一九九三)に土庄町の天然記念物に指定されました。西光寺山門に通じる通りは「銀杏通り」と呼ばれています。この大イチョウ由来しています。

この大イチョウの根元に尾崎放哉と種田山頭火（ともに俳

誌「層雲」同人）の句と略歴を記した一枚の石版が建てられています。平成十六年（二〇〇四）に「放哉」南郷庵友の会が建立しました。山頭火は放哉の死後、墓参のために小豆島を訪れて西光寺に宿泊しました。



大イチョウ

16. 誓願の塔

大師の面影をしのび

王子山に朱色に輝く三重塔。

西光寺の本堂裏に王子山という小高い山があつて、地元では土山と呼ばれています。その頂上に屋根が緑色、胴体部分が朱色の高さ二二メートルの三重塔が建っています。西光寺中興四百年記念行事の一環として昭和五十二年（一九七七）に建立されたもので、誓願の塔と呼ばれています。境内の大イチョウとともに西光寺のシンボルとなっています。

誓願の塔は現在西光寺奥の院となつ

ていますが、元は南郷庵が奥の院でした。南郷庵は昭和五十二年に取り壊されてこの塔の地下霊堂に移されました。地下霊堂は弘法大師像を中心に檀家信徒の霊位（位牌）を安置する永代祠堂です。

西光寺本堂横から塔に続く石段の両側には多くの寄進石が立ち並んでいます。

塔の前には鐘楼と弘法大師石像が設置されています。そこを東側に少し下ると左手にかなり大きくて平らな花崗岩が置かれています。大坂城築城の際に小瀬千軒地区から切り出されましたが、実際には大坂城まで運搬

されなかった残石です。

王子山に登ると、天に伸びる三重塔を見上げ、近くの町並みと少し先にある瀬戸の海を見下ろすことができず。



誓願の塔

17. 王子神社・荒神社

門前まちから寄り道 先人たちの信仰をしのぶ。

誓願の塔の東麓に王子神社と荒神社が並んで建っています。両神社は祭神がそれぞれ異なりますが、地元の同じ人たちが関わったので隣接して建立されたと言われています。

王子神社は一般に王子権現と呼ばれています。石鳥居の銘に「宝暦十庚辰九月吉日」とあるので、一七六〇年に建立されました。祭神は天照大神、伊邪那岐命、伊邪那美命です。社殿および本殿は風雨から建物を保護するため

に鞘堂(外側から覆うように建てた建築物)に納められています。毎年十月九日に祭礼が開催されています。

荒神社の祭神は荒魂神、蛭子命、宇迦之御魂神で、稲荷神が併せて祀られています。神社前の石鳥居に大きな字で「明治十三年」と彫られています。本殿内に大坂城築城時の採石作業中に亡くなった石工たちを祀る家形ラン塔が納められています。毎年七月二十七日に祭礼が開催されています。

両神社の前に広場があります。昔ここに芝居小屋と棧敷がありました。歌舞伎が興行されたという記録が残っています。現在はカルチャーホールという建物が建ち、地域の集会などに使用されています。



王子神社・荒神社

18. 小豆島尾崎放哉記念館

俳句「咳をしても一人」の 放哉終焉の地。

自由律俳人の尾崎放哉が最晩年の約八ヶ月（大正十四年八月～十五年四月）を過ごしたのが西光寺奥の院南郷庵でした。庵は昭和十年（一九三五）に改築され、昭和四十年代半ばまで同所にありました。その後、御本尊は昭和五十一年（一九七六）に西光寺誓願の塔地下霊堂に移され、建物そのものは翌五十二年（一九七七）にシロアリ被害を受けて取り壊されました。

平成六年（一九九四）に町おこしの

一事業として、土庄町および関係者の尽力により、庵があった場所に昔ながらの形で庵が復元されました。それが小豆島尾崎放哉記念館です。館内には放哉の句稿、書簡、手記、知人宛ての葉書・電報、直筆の短冊および掛軸、肖像写真などが展示されています。

記念館前には荻原井泉水の揮毫によって昭和三年（一九二八）に建立された句碑「入れものがない両手でうける」があります。また、石碑「俳人放哉易簣之地」、石版「尾崎放哉句碑由緒記」の他、関連する句碑・石碑・石板も何基か建立されています。

記念館前の井戸の隣に放哉が利用した銭湯三日月湯の看板壁（鏝絵）とその銭湯を利用したことを記す大正十四年（一九二五）十二月二十七日付けの井泉水宛て封書の一節を彫った石版が

設置されています。

その石版の隣にある駐車場の一角に「障子あけて置く海も暮れ切る」という放哉の句を彫った高さ四、五メートルばかりの石版があります。小説家吉村昭（平成十八年没）の揮毫によるものです。吉村は若い頃から放哉の俳句を愛読し、放哉の小豆島時代を扱った小説『海も暮れ切る』を昭和五十五年（一九八〇）に講談社から出版しました。



小豆島尾崎放哉記念館

青い海に浮かぶ小島の海が 白い砂の散歩道に。

小豆島国際ホテルの南側には波静かな余島湾が広がっています。潮の干満の差が大きな湾です。余島湾の東北端、国際ホテル東南部辺りは潮流が特に速く、夏季には遊泳禁止区域となります。しかし、干潮時には砂浜が現れ、すぐ南の大余島と陸続きとなります。四月末から五月中旬頃にかけての春の大潮時分には多くの潮干狩り客で賑わう場所です。

最近、このあたりは「エンジェルロ

ード（天使の散歩道）」と呼ばれる観光スポットとなっています。潮の干満で砂浜（道）が現れたり消えたりするのが魅力となっています。干潮時に大切な人と手をつないで歩くと、天使が舞い降りて来て願いを叶えてくれると言われています。若いカップルが手をつないで歩く姿は微笑ましく、夢があり、まさしく絵になる風景です。

平成二十年（二〇〇八）一月にNHK総合テレビで『これこそ！わが町元気魂』という正月特別番組が放映されました。全国のNHK放送局が制作した地域紹介の三十秒間映像の順位を争うというものでした。その結果、高松放送局制作の「エンジェルロード」が見事大賞を受賞しました。見る人に夢を与えてくれるというのが受賞理由でした。



エンジェルロード



西光寺への参道・昭和3年（現：土庄本町）